

Juichi WAKISAKA Race Report

2013 AUTOBACS SUPER GT Round 1 -OKAYAMA GT 300km RACE-

◆◆ 不安定な天候の中、粘りの走りで 8 位チェッカー ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	15位	8位

開催日：2013年4月6日-2013年4月7日

サーキット：岡山国際サーキット（岡山県美作市、コース全長：3.703km）

レース距離：82周（303.646km）

入場者数：予選日8,000名、決勝日16,000名、合計24,000名

2013年シリーズの開幕戦を迎えた SUPER GT。4月6-7日、岡山にある岡山国際サーキットを舞台に、初戦の戦いが繰り広げられた。

脇阪にとってチーム加入2年目となる今年、No.39 DENSO KOBELCO SC430の足下は昨年までのミシュランに変わり、ブリヂストンタイヤへと変更。シーズンオフに行われたテストは大半がドライコンディションに恵まれ、その中で進化を遂げた SC430に見合うセットアップなどを丹念に続けてきた。

そして今シーズン、チームではシリーズを通して安定した速さと強さをしっかりとアピールする戦いを念頭に置き、年々激しくなるライバルたちとのバトルに挑む。

搬入日の金曜日は春の陽気に包まれて穏やかな天気だったが、予選日の土曜は天候が急転。冷たい雨と風が吹きつける荒れ模様になった。このため、ノックアウト方式の予選はQ1をもって終了、Q2がキャンセルされるという結果になっている。一方、決勝日の日曜は時折日差しが照りつけるものの、気まぐれに雨がぱらつき、寒さが先行する中での戦いとなった。そんな中、No.39 DENSO KOBELCO SC430は最後尾スタートから8位フィニッシュを果たす結果を得ている。



■ 4月6日(土)

09:00-11:00 公式練習

15:00-15:00 ノックアウト予選 (Q1)

※ノックアウト予選 (Q2) は荒天により中止、Q1の結果により決勝グリッドが確定となった。

【公式練習】 11番手 / 1'37.075

レースウィークを前に、「週末は荒れ模様となるため、急を要する外出は控えるように」という天気予報が報道された今回。予報どおり、金曜日の好天気から一転し、土曜日は予選を前に暴風雨となる荒れた空模様へと変貌した。

これに先立ち行われた公式練習。開始の午前9時を前にポツポツと雨が落ち、ウェット宣言下でのスタートを切る。スリックタイヤを装着してコースに向かった No.39 DENSO KOBELCO SC430 は、タイヤの皮むき作業に取り掛かった。その後、雨は本降りとなり、レインタイヤを要するコンディションとなったため、チームではウェットでのセット確認など、必要な作業を次々とこなしていく。

時間の経過とともに、コースの前半セクションの一部には、川ができるほどの危険なコンディションとなったため、コースアウトする車両が続出。合計5回の赤旗中断という難しい状況では、セッション最後のGT500専有走行も行うことが難しくなり、結果、キャンセル扱いとなった。これにより、残念ながら脇阪はドライブする機会が巡らず、朝のセッションを終えている。なお、No.39 DENSO KOBELCO SC430 では、石浦宏明選手がマークした1分37秒075のタイムで11番手につけることになった。



【ノックアウト予選 (Q1)】 NO TIME

今シーズン、GTAでは予選方式を見直し、これまで時折採用してきたスーパーラップを廃止、全サーキットの予選でノックアウトを導入することが決まっている。さらに、Q1からQ3まで3回のアタックチャンスをQ1、Q2の2回に変更。各ドライバーが1回ずつアタックする方式が採られた。なお岡山戦では、全15台がQ1に出走、そこからQ2へは上位8台が進出することができる。

Q1でNo.39 DENSO KOBELCO SC430を駆るのは、石浦選手。最初にGT300クラスがアタックを開始したが、セッション中に2度の赤旗中断で大幅にスケジュールが遅延。GT500のセッションは当初の予定から45分遅れの午後3時にスタ

ートした。雨量は多少少なくなっていたが、風が強い中、ピットを離れた石浦選手。気温 14 度、路面温度 16 度のコンディション下で、アタックを開始する。周回ごとにタイムを縮め、1 分 38 秒 950 のタイムをマーク、6 番手につける。だが、自己ベストラップの翌周、1 コーナー進入でマシントラブルによりコースアウト。クルマがグラベルにスタックしたためコース復帰ならず、これが赤旗の原因となってしまった。

ブレーキトラブルによるアクシデントとはいえ、ルール上赤旗中断の原因を作った車輦は、タイムが抹消される。よって、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は Q2 への進出が断たれたのはもちろん、予選グリッドも GT500 最後尾に甘んじるという苦い開幕戦の予選となった。

予選日を走行せずに終えることになった脇阪。「朝のセッションも雨が酷くなり乗るチャンスがありませんでした。予選でのアタックを含め、まさに天候に翻弄された一日でしたね。結果としては厳しい状態です。タイヤに限らず、クルマのほうもまだまだ見直しをして、決勝に挑む必要があるでしょう」と厳しい表情を見せた。一方で、オフシーズンのテストや今季の目標に触れ、「1 年ぶりにブリヂストンタイヤでのクルマに乗ることになり、去年装着していたミシュランタイヤとの違いなどを体感しました。チームとしては、去年後半戦になっていいパフォーマンスを見せることが難しい状況が続いたので、今年はそういうことがないよう、速さはもとより、強く、レースで何があっても動じないようなチーム、クルマをスタッフと一緒に作っていききたいですね」と語った。



■ 4月7日(日)

09 : 15 - 09 : 45 フリー走行 (09 : 55 - 10 : 15 サーキットサファリ)

14 : 00 - 決勝 (82周)

【フリー走行】 13番手 / 1'31.878

決勝日を迎えたサーキットは、前日のような悪天候ではないものの、日差しが出ているのに雨が降ったり止んだりという、極めて不安定で気まぐれな空模様となる。朝、9時15分からスタートしたフリー走行ではまだ路面が濡れている状態で、まずはレインタイヤを装着してのコースインとなった。

No.39 DENSO KOBELCO SC430 には決勝でスタートドライバーを務める石浦選手がまず乗り込み、ウェットコンディションでのクルマの仕上がりをチェック、その後、脇阪へとスイッチした。

異なるウェットタイヤを装着してコースに向かった脇阪。あらゆるコンディションにも対応できるよう、チームでは時間の許す限り、最後まで細かな調整を精力的に行った。また、時間の経過に合わせて路面も改善したことから、レインタイヤに代えてスリックタイヤを装着。脇阪がチームベストタイムをマークした。フリー走行枠では 13 番手のポジションに留まったが、その後行われたサーキットサファリの間に、大きくペースアップ。刻んだ 1 分 24 秒 757 のベストタイムは、非公式ながら 3 番手のものとなり、決勝に向けて明るい材料を提供することになった。



【決勝】 8 位 / 3 ポイント獲得（シリーズポイント：3 ポイント、シリーズランキング：8 位）

午後に入り、薄曇りに変わったサーキット上空。風が強く、雲の流れも早いため、決勝中にひと雨降ることも十分に考えられる中、午後 2 時に 82 週の戦いがスタートする。フォーメーションラップで 1 台の車輛がコースアウトしたこともあり、さらにもう 1 周セーフティカーが GT 車輛を誘導。レースは 81 周での戦いになった。

石浦選手は最後尾から追い上げを開始。しかし、気温が低く、十分に温まっていない路面状況を考慮すると、早々からアグレッシブな走りを求めるのは困難なこと。とはいえ、タイヤに熱が入り、次第にいいラップタイムを刻み始めた石浦選手はチャンスを実にモノにし、前車をパスしていく。早くも序盤で 7 番手までポジションアップを果たした。その後、42 周を終えてルーティンワークのためにピットイン。脇阪へとスイッチする。

ポジションキープのままコース復帰を果たした脇阪。決して納得のいくマシンコンディションではなかったが、高い集中力を見せ、冷静に込み合ったコースで果敢に攻めの走りを披露した。結果、早々にポジションをひとつあげて 6 番手で周回を重ね、終盤に向けて上位との攻防戦に期待がかったのだが、ここへきて再び天候が悪化。空が灰色へと変わり、ポツリポツリと雨が落ち始めた。

こうなると、コース上も荒れ模様となり、コースアウトしたりスピンする車輛が出るなど、大混乱。さらにショートコースの岡山ならではのといえるような大渋滞もあちこちで発生。ポジションアップよりむしろ、もらい事故を避けるよう万全の態勢で周回を重ねていくことが大事になっていく。だがその一方で、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は背後についた No.12 GT-R との攻防戦をも繰り広げていた。しかし脇阪は巧みに後続車の厳しいプッシュをかわし、次第に差をつけるパフォーマンスで善戦する。

だが、レース終盤、雨が厳しくなる中、78 周目に 12 号車の先行を許すことになり、さらにその後方にいた No.6 SC430 とはファイナルラップのヘアピンで激しいバトルの末に接触。これでスピンを喫することになり、8 位で開幕戦を終えることになった。



「今日は、ちょっとキツイ戦いになりました。スタートドライバーの石浦もガンバって粘りの走りを見せてくれたのですが、スイッチしてからクルマのバランスが自分にとって今ひとつで、序盤は良かったのですが、次第にペースアップするのが難しい状況となりました。加えて終盤の雨で厳しさが増えて、結果、後続車の先行を許すことになったのはとても残念です。最後になって不確定要素がたくさん出てしまったな、という感じでした」とレースを振り返った脇阪。富士に向けて、気持ちを切り替えて頑張ると言い、「今、クリアになっていないところをしっかりと解決し、いい結果を出していきたいと思いますので、今シーズンもご声援下さいますよう、よろしくお願いします」と奮闘を誓った。

厳しいコンディションの中、耐え忍び、8位でフィニッシュした No.39 DENSO KOBELCO SC430。第2戦はトヨタ・レクサスのお膝元、ホームコースとなる富士スピードウェイでの戦いとなる。さらにポテンシャルアップしたパッケージで強いレースを見せてくれるに違いない。

次戦は、4月28日(日)-29日(月・祝)に富士スピードウェイ（静岡県御殿場市）で開催される。

【Photo Gallery】



